

二千年の技術を受け継ぐ 「鍛冶屋」から学ぶこと

ジャーナリスト かくま つとむ



鍛冶屋の仕事場【徳島県穴喰町】



真っ赤になった鎌材【長野県信濃町】

ある雑誌の取材で、足かけ五年、日本全国の鍛冶屋さんを旅した。歩いた地域は北海道から沖縄まで全都道府県。訪ねた職人は一〇〇余人にのぼる。おかげで手打ち刃物や農具の現状と、それをとりまく社会構造をさまざまな角度から眺めることができた。

銅に次いで鉄という金属を得た人類は、ふたつの加工方法を編み出した。ひとつは青銅器のように溶かして型に流し込む鋳造。もうひとつは塊を赤熱、柔らかくなつたところを鎚で打ち鍛え、形を作っていく鍛造である。

日本には青銅と鉄がほぼ同時に大陸から伝わったといわれており、その素材特性から、青銅はもっぱ

ら祭祀用、鉄は武器や農・工具のような実用品に使い分けされたそう。鍛冶は後者を司つた日本最古の工業技術者で、その作業形態は二〇〇〇年以上たった今もほとんど変わっていない。

鉄を熱する火床と風を送るフイゴ、作業台である金敷、鉄を打つ手鎚。それに材料を火から出し入れする金バシ。鍛冶屋は最低これだけの設備があれば店開きできる。

新聞紙に火を付け、木炭の間に突っ込んでフイゴの取っ手を動かす。空気が火床の底からゆっくり吐き出され、炭が熾り始める。全体に火が回つたところで鉄を置く。鉄は鍛冶屋が煙草を一服するうちに芯まで赤くなる。

それを金敷の上で叩く。硬めの粘土を打ち付けたような感じで、ぐいっと鉄が延びる。冷めたら焼き、焼いては叩く。今度はタガネで割り込みを入れる。同時にもう一種類の鉄を用意する。炭素分の多い鋼だ。

割り込んだ隙間にホウ砂と鉄粉を混ぜたものをまぶし、延ばした鋼を挟んで再び赤熱する。チリチリと火花が飛び始めたところで取り出し、勢いよく打ち付けると派手に火の粉が飛んで二種の鉄はピタリと接合する。

さらに打ち延ばし先を尖らせる。鉄はいよいよ刃物らしい形になっていく。焼き入れ、焼き戻しという熱処理を経ると、外側の鉄



夫婦鍛冶屋【静岡県藤枝市】



野鍛冶の包丁 [愛媛県松山市]



農具のいろいろ [埼玉県庄和町]

たり鍬になるさまは、鉛細工師の大道芸を見るようだ。コンピュータやロボットの活用といった、高度に発達を遂げた現代工業の視点で見ると、鍛冶屋の仕事はいかにも原始的に映る。ひとつひとつが手作りだから効率はよくない。だが、一点ものであるがゆえに、ときに大企業ができないような小回りのよさを可能にする。

ある鍛冶屋は自動車メーカーの城下町にある。そこへ時折、「お城」から依頼が来る。ボディの板金に使う特殊なコテの注文だ。出番は少ないので何セットもいらぬが、なくても困る。合理化が徹底している自動車メーカーでは、もはやそのような社内需要にも対応

は硬さが変わるが、間に挟まれた鋼は硬度を増す。これが研ぎやすくて切れがよいことで評価の高い、和式刃物の基本構造である。

手練れの職人にかかると鉄は鉛のように柔らかく、そして従順になる。実際、ただの鉄の棒が包丁になっ

できず、個人経営の鍛冶屋に頭を下げるしかないのだという。

二〇〇〇年前、鍛冶屋は時代の最先端を行く技術であった。そのノウハウの中には金属工業に必要な基本がほとんど詰まっております。鍛冶屋に頼めば何でも作ることができた。車も兵器も機械部品も、最初のプロトタイプを作ったのは鍛冶屋である。その歴史的事実はもつと再評価されてよいように思う。

鍛冶屋巡りで掻き立てられるもうひとつの好奇心は、生み出される道具の個性だ。たとえば漁師町の包丁。堺や京都あたりで生産されるプロの料理人向けの包丁と違って、出刃包丁型なのに両刃だったりする。

始めは珍しがっていたものの、歩くうちに、日本では魚をおろす包丁は片刃よりむしろ両刃型が普通であることに気付いた。カツオをさばく細長い包丁などは、九州から千葉まで黒潮の流れ沿いにしか分布しない。

農村部の主力は鍬である。といっても新品の鍬は高価だから、しょっちゅう売れるわけではない。

鍛冶屋の仕事はすり減った刃先だけを安く付け替える「先掛け」が中心だ。儲けは薄いですが、農作業のひとつと段落した冬、必ずまとまった注文がある。

同じ村でも、使う場所の土質や傾斜によって、好まれる鍬の形は変わる。だから、先掛けに持ちこ

まれる鍬を見れば、顔に覚えのない客でも、どこの在の者がかわかるといふ。

いかにもプロらしいそんな洞察も面白いが、先掛けという制度自体も興味深い。今でこそ鉄や銅、アルミは有り余り、ともすればゴミ同様に扱われるが、金属は本来、貴重なものだった。それが証拠に古い時代の鍬類はほとんど残っていない。先掛けを繰り返して、いよいよ使えなくなったら火で鍛え潰し、鎌や包丁などの材料に再利用したからである。

技術に対する敬意も、資源への感謝も忘れた社会に健全な未来はない。せめて暮らしのどこかに、先掛けのような心を取り戻さないと、いつか火の神様のバチが当たるだろう。

■リレー随想・推せん者のことば

彼は小学館の『大人の生活誌』『サライ』のレギュラー記者であると同時に、紀行作家であり、また、とくに天然素材や伝統工芸の職人の聞き書きではおそらく国内トップの書き手だと思います。木工職人、竹細工職人（とくに和竿職人）、そして鍛冶職人などの聞き書き紀行は非常に格調が高く、またおもしろく読めるものばかりです。小学館から単行本や文庫がいくつかが出ているので是非一読ください。

多田 実

かくまつとむ 略歴
鹿熊 勤



ジャーナリスト

1960年、茨城県・霞ヶ浦の畔で生まれる。釣り雑誌の編集記者を経て27歳のときにフリーのライターとなる。最も得意とするのは自然（アウトドア）、環境問題、第一次産業、手工業などの分野。「学問と娯楽、過去と未来の間をつなぐ触媒」をモットーに、取材やインタビュー、評論活動を行っている。現在『BE-PAL』『サライ』など余暇系月刊誌を中心に活動。

著書に日本の文化を支えてきた生活道具の現状と素材の科学的特性をルポした『天然素材の生活道具』、日本の水文化と環境の現状に釣り人の視点で切り込んだ『竿をか

ついで日本を歩く』がある。また、職人の技と文化を追った聞き書き集に、最後の江戸木挽き・林以一氏の『木を読む』、江戸和竿開祖・東作六代目松本三郎氏の『竹、節を語りて強し』、水戸徳川家刀鍛冶末裔・横山祐弘氏が鉄を語る『鍛冶屋の教え』、四国の川漁師・宮崎弥太郎氏に密着した『仁淀川漁師秘伝』（いずれも小学館）などがある。今回触れた鍛冶屋めぐりは月刊『ラビタ』1995～1999年に連載された。この取材以来、金属全般に興味を広がり、取材先の近くに古い精錬地や鉱山があると鉱滓や原石などを密かに拾い集めている。